

# 内藤湖南撰「鳴鶴日下部先生碑銘」 訳注

重野 宏一

## 解題

本稿は、明治、大正期を代表する書家、日下部鳴鶴（一八三八～一九二二）の事跡を記した「鳴鶴日下部先生碑銘」の訳注である。まず、はじめにその略伝を簡単に述べておきたい。

日下部鳴鶴は、天保九年（一八三八）八月十八日、近江彦根藩士田中惣右衛門の次男として江戸で生まれた。母は加納氏である。初名は八十八、三郎、内記、のち東作と改めた。字は子暘、号は初め東嶼、翠雨といい、のち鳴鶴と改めた。また、晩年には野鶴、老鶴、鶴叟などと号した。安政六年（一八五九）、彦根藩士日下部三郎右衛門の養子となり、時の幕府大老であった井伊直弼に仕えた。しかし、直弼が桜田門外の変によって暗殺された時、供をしていた養父三郎右衛門も亡くなった。この一件によって、彦根藩はその罪を問われ、滅封されることとなり、同時に鳴鶴も困難に直面した。明治元年（一八六八）、徴士として明治政府に召さ

れ、太政官の小書記官からやがて大書記官へと進み、この時、三條実美や大久保利通の信任を得た。しかし、同十一年（一八七八）、大久保が暗殺されると、翌十二年には官を辞し、書家として書法の研究に専念することを決意した。ちょうどその翌十三年には、清国公使何如璋に招かれて楊守敬が来朝し、その影響を強く受け、彼の元で帰国までの四年間、漢魏六朝の書法を学んだ。同二十四年（一八九一）三月にはついに渡清し、俞樾、吳大澂、楊峴、吳昌碩らと交流し、「東海の書聖来たる」と称された。帰国後は後進の指導に力を注ぎ、同二十七年（一八九四）には「同好会」を起し、また同四十年（一九〇七）には「談書会」を設立し、書のみならず文人間との交流も図った。大正六年（一九一七）には、傘寿の寿筵が日本橋俱樂部で開かれ、各地から文人、門下およそ三百名が参集し、同時に大同書会が結成され、その会頭として機関誌『書勢』を発行した。同十一年（一九二二）一月二十七日、八十五歳の生涯を閉じた。鳴鶴の門下からは、近藤雪竹、丹羽海

鶴、比田井天来、渡辺沙鷗、黒崎研堂、山本寛山、井原雲涯ら名だたる書家を輩出しており、その影響は今なお見られる。

次に碑についての基本的な情報を記しておく。

○所在……豪徳寺（東京都世田谷区豪徳寺二―二四―七）

○碑身寸法……高三二〇糎、寛一六一糎、厚三四糎

○題額……篆書、浮き出し彫、「生」字、縦一九糎、横一七糎

○碑文……楷書、円彫、一字三・五糎角、三三行、行四七字

○石材……仙台石

○篆額者、撰文者、石工……西園寺公望、内藤虎、野村保泉

○立碑……昭和八年（一九三三）十月

所在地の豪徳寺は彦根藩井伊家の菩提寺であり、大老井伊直弼をはじめとした井伊家歴代の墓がある。また、その家老であった岡本黄石（二八一―一八九八）や遠城謙道（一八二三―一九〇一）など直弼ゆかりの人物の墓も数多く見られる。鳴鶴の墓もその一つであり、その墓銘は終生親交のあった吳昌碩（一八四四―一九二七）が篆書で「日下部東作、徳配琴子之墓」と書いている。

碑の文字は鳴鶴の書を集字したもので、その編集を行ったのは

高弟である比田井天来（一八七二―一九三九）といわれている。

天来は、すでに『鳴鶴先生隸法字彙』（書学院後援会、一九二六年）や『鳴鶴先生楷法字彙』（書学院後援会、一九三一年）を編纂しており、本碑の集字においても、それらが基礎となっているものと考えられる。具体的にその集字の中心となる文字は、鳴鶴の楷書のなかでも最高傑作と称される「大久保公神道碑」である。

撰文の内藤湖南（一八六六―一九三四）についてあらためて贅言する必要はないが、鳴鶴と湖南との関係については研究がほとんど行われておらず、未だ詳らかではない。しかし、湖南が鳴鶴を訪ねて書についての議論をまとめた『鳴鶴翁清話』（明治三十四年六月二十四日、七月一日『大阪朝日新聞』、のち『内藤湖南全集』第四卷、筑摩書房、一九七一年、に収む）なる一文もあり、碑文中にも「余、両世交はりを先生に辱くす。不文を以て辞すべからざるなり」とあることから、やはり両者に深い関係があったことは確かであろう。

本碑に先立つ鳴鶴の伝記資料として、井原録之助（雲涯）編の『鳴鶴先生叢話』（昭文堂、一九二五年、以下『叢話』と略す）に収める「日下部鳴鶴先生小伝」（以下「小伝」と略す）があり、本碑の内容との類似から見ても、湖南は撰文にあたってこれを大いに参考にしたことはまず間違いない。さらに、鳴鶴述『学書経

歴談』(巖谷一六評、清水書店、一九一六年、のち『鳴鶴学書要録』『真跡鳴鶴遺稿全集』第六卷、日本書道教育学会、一九七一年、に影印を収む)や『叢話』に収める逸話などを挿入したものと考えられる。したがって、鳴鶴の伝記としてはとくに目新しいエピソードは見られない。しかしながら、本碑は鳴鶴の重要な事跡について、冗長に陥らず要を得て伝えており、その技巧を凝らした文章とともに、今なおその資料価値は失われていない。

最後に本碑の先行研究を紹介しておく。碑文の翻刻については、すでに『世田谷の碑文その一』(世田谷区教育委員会編、一九七一年)および『豪徳寺文化財総合調査報告』(世田谷区立郷土資料館編、世田谷区教育委員会発行、一九八七年)があり、さらに『湖南文存』巻十四(『全集』第十四卷、一九七六年)にも収められている。『鳴鶴先生遺墨集』(鳴鶴翁五十年祭遺業顕彰会、一九七一年)には、石橋犀水氏による訓読文が掲載されているが、銘文については釈文のみである。その他、中西慶爾氏『日下部鳴鶴伝』(木耳社、一九八三年、以下『鳴鶴伝』と略す)や近藤高史氏『明治書道史夜話』(芸術新聞社、一九九一年)をはじめ、鳴鶴の伝記において、本碑の紹介がほぼ必ずといってよいほど見られるが、それらはいずれも部分的な引用に止まり、碑文全体の考察は残念ながら未だ十分に行われていないようである。今、こ

こに敢えて訳注を草する所以である。

#### 注

(一) 碑における彫りの技法については、森章二氏『碑刻手帖——見方と技法』(木耳社、一九八八年)に詳しく述べられている。また、同氏『碑刻——明治・大正・昭和の記念碑——』(木耳社、二〇〇三年)には、野村保泉の紹介とともに、本碑が取り上げられている。本稿においても森氏の研究を大いに参照した。

(二) 彦根藩家老。名は宜迪、通称は半介、字は吉甫、黄石と号す。近江彦根の人。宇津木久純の四子。十一歳の時に岡本織部佑業の養子となる。幕末の動乱の最中、主君直弼が暗殺され、多難な時局を家老として見事に藩をまとめた。維新後は東京麹町に隠棲し、詩人として麹坊吟社を起し、詩壇の中心となった。詩は、中島棕隠、梁川星巖、菊池五山らに学び、とりわけ星巖の影響を強く受けている。その詩風は杜甫を宗とした。また、渡辺崋山、大槻磐溪、小野湖山、大沼沈山ら、多くの文人と交わり、鳴鶴や巖谷一六も黄石に詩を学んでいる。なお、岡本黄石については、世田谷区立郷土資料館が三度にわたって特別展を開催している。それらは『漢詩人岡本黄石の生涯』(世田谷

区立郷土資料館編、二〇〇一年）、『漢詩人岡本黄石の生涯 第二章 その詩業と交友』（同館編、二〇〇五年）、『漢詩人岡本黄石の生涯 第三章 三百篇の遺意を得る者』（同館編、二〇〇八年）にまとめられている。

（三）彦根藩鉄砲足軽。名は保教、通称は豊太郎、平右衛門、三藏。儒学を横田俊輔、画を吉田雪斎に学ぶ。銃術に巧みであった。桜田門外の変後の幕府による彦根藩追罰に憤り、時の老中井上正直に書を呈するなど、藩の救済のために奔走するが果たせず、国元へ送還された。慶応元年には隠居を許されて出家し、以後三十七年にわたり、豪徳寺にて直弼の掃墓と読経に明け暮れた。詳しくは、『遠城謙道伝』（佐成源五郎編、一九〇二年）を参照。

（四）豪徳寺にある鳴鶴書碑については、宇野雪村氏「豪徳寺の鳴鶴書碑」（『訪碑紀行（二）』中西慶爾氏編、木耳社、一九八四年）に紹介がある。

（五）鳴鶴と呉昌碩の交流については、松村茂樹氏「呉昌碩と日下部鳴鶴」（『呉昌碩研究』研文出版、二〇〇九年）を参照。

## 凡例

一、訳注の体裁は、「〔釈文〕」、「〔訓読〕」、「〔現代語訳〕」、「〔注〕」から成る。

一、釈文において、碑板では随処に俗字、異体字、古字等が用いられているが、それらはすべて通行の正字体に改め、訓読では新字体に改めた。

一、『湖南文存』では若干の文字の異同が見られるが、それらは注に併記した。

一、図版として掲げた碑文の拓本は、『鳴鶴先生碑銘伝』（田中誠爾編輯、誠之書房、一九三七年）所載のものである。

鳴鶴先生碑銘

鳴鶴曰下部先生碑銘

正二位大數位公爵西園寺公望篆額

明治初年以書法名家者率承卷葉湖風以便媚俗相尚其不屑時史習氣者則頗取法貴名松翁澹庵唐蹟當是時舉世稱為大家者有三君焉曰長三洲曰巢谷一六曰下部鳴鶴長君以八法授下部先生尤深書學無餘碑帖工力并臻加以壽考此為一代宗師其緒論至今沾沾學書之家焉先生諱多榮以天分勝日下部先生尤深書學無餘碑帖工力并臻右衛門世任井伊氏新封藩士畫減祿俸嘗艱苦會水戶武田耕雲齊舉兵筑波事敗由中山道西走京師治途洵援其嗣家遭并伊氏新封藩士畫減祿俸嘗艱苦會水戶武田耕雲齊舉兵筑波事敗由中山道西走京師治途洵援其所為先生因自請星馳抵大津謁公軍前詭言聞武田改運越前公不須進兵以滋事端也是時先生實未審武田蹤跡特設辭以濟一時之急意謂武田若直赴京師將以一死謝其罪也已而武田果逞越前公亦不抵荏報因得無事其機警果敢有如此者明治二年以徽士入東京累進太政官大書記官叙五位為三條大久保二公所信任常乘機密大久保公遇刺之明年先生年四十二挂冠而去專研臨池其明筆清國楊惺吾以參贊星軺來駐東京惺吾受金石之學於潘瑞初其東渡多攜碑帖精本先生與巖谷一六松田雪柯二君就而問焉初先生獲菱湖真蹟喜之雖建松翁之世未甚重其書比知其可重則松翁已亡乃訪其門人百方得其遺說謂宜含集帖而學原碑學原碑宜參之真蹟真蹟雖少佳者我入唐諸公之書具存益以寫經進而尋繹石刻意致所由未難謂宜含集帖而學原碑學原碑宜參之真蹟真蹟雖少佳者我入唐惺吾屏去舊習書法日長廿四年遂航江浙廣觀古器舊拓與俞曲園吳憲齋楊見山諸人締交而書名震於海外矣既歸弟子益進先生好游震初山水莫不造訪每遊必書者廬至殆不欲為鐵門限其各體書皆風靡一時大抵其用筆宗北碑之峻拔而結構則采唐初之端整雖晚歲之作秀潤妍妙不流枯渴蓋其用心良苦有匪夷所思者每教人謂人品須高師法須古運規矩於自然寓雄奇於靜穆斯得真趣而到古人矣清國羅森蘊許其書謂得力北碑而無雍衷之氣一推先生為盟主大正六年辛酉十月門下士開壽筵於東京四方名士來會者數百人蓋自古書人未有若先生之盛也十一年一月廿七日病卒享年八十五先卒朝旨特陞叙四位并授東宮西郊世田谷豪德寺營城夫人無子養農公君子韓二郎配以女子子承家為內務技師工學博士晚生二男曰豆三醫學博士曰堯列起家五女皆適人頃門人故舊釀資建碑於六藝堂云末技尚矣猶斯餘兩世傳文先生不啻以不文之辭也乃系銘曰

寶發膏肓麟觀雲消水溪翰墨之統腕如行貫振振結挽茲頑觀象梁閣鋒穎未刊旌表蒙竟愈廢就成風氣嘉道已遷天朝藩翰根乎六代奇古毛碑深醇象背三堆強強三筆逆態花翁取範力開華嶽嶺：先生眼曠千手撫攸磨厓馳我駭方負弗區突過前賢炙手觀晉可纖斷絃墨漆紙輝窮神盡思研幾已深法度已備五十餘載悠然建幃落：大師出類拔萃未派汎濫遂睹其弊循：喜訪無真跡山沮水涯儼存鴻製凡厥後學朕膺勿替

陸中內藤虎撰

野村保潔刻

〔積文〕

# 「鳴鶴先生碑銘」

鳴鶴 日下部先生碑銘

正二位大勲位公卿西園寺公望篆額

明治初年以書法名家者率承卷菱湖風以便娟柔媚相尚其不屑時史習氣者則頗取法貫名崧翁浸淫唐蹟當是時舉世稱爲大家者有三君焉曰長三洲曰巖谷一六曰日下部鳴鶴長君以八法授至尊矜慎不多作書巖谷君與日下部先生則由唐蹟溯洄北碑用長鋒迴腕一變舊法巖谷君書險側多姿以天分勝日下部先生尤深書學兼綜碑帖工力并臻加以壽考屹爲一代宗師其緒論至今沾句學書之家焉先生諱東作字子暘別號鳴鶴近江彦根人本姓田中氏考曰總右衛門世仕井伊侯妣某氏先生第二子以天保九年八月十八日生於藩之江戶邸中既長爲同藩士日下部三郎右衛門諱令立所養配以其女萬延庚午井伊侯遭難櫻田門三郎右衛門君殉焉先生少從鄉人田中芹坡學又修槍法其嗣家遭井伊氏新削封藩士盡減祿備嘗艱苦會水戶士武田耕雲齋舉兵筑波事敗由中山道西走京師沿途洶擾一橋公慶喜將據彥根而過之公爲水戶烈公子彥根藩以櫻田故與水戶氏相仇視或謀侯公至而刺之藩老臣大憂不知所爲先生因自請星馳抵大津謁公軍前詭言聞武田改逕越前公不須進兵以滋事端也是時先生實未審武田蹤跡特設辭以濟一時之急意謂武田若直赴京師將以一死謝其罪也已而武田果逕越前公亦不抵彥根因得無事其機警果敢有如此者明治二年以徵士入東京累進太政官大書記官敘正五位爲三條大久保二公所信任常參機密大久保公遇刺之明年先生年四十二挂冠而去專研臨池其明年清國楊惺吾以參贊星軺來駐東京惺吾受金石之學於潘孺初其東渡多携碑帖精本先生與巖谷一六松田雪柯二君就而問焉初先生獲菱湖眞蹟喜之雖逮崧翁之世未甚重其書比知其可重則崧翁已亡乃訪其門人百方得其遺訣謂宜舍集帖而學原碑學原碑宜參之眞蹟眞蹟雖少佳者我入唐諸公之書具存益以寫經進而尋繹石刻意致所由未難溯古法也於是規撫光明藤后空海逸勢諸名蹟盡得唐法及見

惺吾屏去舊習書法日長廿四年遂航江浙廣觀古器舊拓與俞曲園吳憲齋楊見山諸人締交而書名震於海外矣既歸弟子益進先生好游囊內佳山水莫不造訪每游乞書者屬至殆乎欲爲鐵門限其各體書皆風靡一時大抵其用筆宗北碑之峻拔而結構則采唐初之端整雖晚歲之作秀潤妍妙不流枯渴蓋其用心良苦有匪夷所思者每教人謂人品須高師法須古運規矩於自然寓雄奇於靜穆斯得真趣而到古人矣清國羅叔蘊評其書謂得力北碑而無旃裘之氣一生書丹之石不下千數奉 勅所書大久保公神道碑最爲傑作先生稟性和夷喜獎掖後進談書會大同書會之興莫不推先生爲盟主大正六年八十門下士開壽筵於東京四方名士來會者數百人蓋自古書人未有若先生之盛也十一年一月廿七日病卒享年八十五先卒 朝旨特陞敘從四位葬於東京西郊世田谷豪德寺塋域夫人無子養巖谷君子辨二郎配以女子子承家爲內務技師工學博士晚生二男曰旦三醫學博士曰環別起家五女皆適人頃門人故舊釀資建碑豪德寺中以圖不朽屬余以銘余兩世辱交先生不可以不文辭也乃系銘曰

書於六藝豈云末技尚矣籀斯篆隸鬱起鍾王接踵姿媚方軌含規孕矩窮極奧旨搨摸跡漫刻雕板爛龍跳虎臥盡經塗竄殘膏賸馥雲消水渙翰墨之統脆如朽貫孰振墜緒挽茲頹爛魏象梁闕鋒穎未刊旃裘蒙茸竟愈廢紈成爲風氣嘉道已還 天朝藻翰根乎六代奇古毛碑深醇象背三娘雄強三筆逸態崧翁取範力闢蕪穢矯々先生眼曠千年撫彼磨厓融我殘賤方員弗區突過前賢復乎魏晉可續斷絃墨漆紙輝窮神盡思研幾已深法度已備五十餘載悠然建幟落々大師出類拔萃末流汎濫逆睹其弊循々善誘無隱真諦山阻水涯儼存鴻製凡厥後學服膺勿替

陸中內藤虎撰

昭和八年十月

集鳴鶴先生書

野村保泉刻

## 鳴鶴日下部先生碑銘

## 正二位大勲位公爵西園寺公望篆額

明治初年、以書法名家者、率承卷菱湖風、以便娟柔媚相尚。其不屑時史習氣者、則頗取法貫名菘翁、浸淫唐蹟。當是時、舉世稱爲大家者有三君焉。曰長三洲、曰巖谷一六、曰日下部鳴鶴。長君以八法授至尊、矜慎不多作書。巖谷君與日下部先生、則由唐蹟溯洄北碑、用長鋒迴腕一變舊法。巖谷君書、險側多姿、以天分勝。日下部先生尤深書學、兼綜碑帖、工力并臻。加以壽考、屹爲一代宗師。其緒論至今沾句學書之家焉。先生諱東作、字子暘、別號鳴鶴。近江彦根人。本姓田中氏、考曰總右衛門。世仕井伊侯、妣某氏、先生其第二子。以天保九年八月十八日、生於藩之江戸邸中。既長爲同藩士日下部三郎右衛門諱令立所養、配以其女。萬延庚午、井伊侯遭難櫻田門、三郎右衛門君殉焉。先生少從鄉人田中芹坡學、又修槍法。其嗣家遭井伊氏新削封、藩士盡減祿、備嘗艱苦。會水戸士武田耕雲齋、舉兵筑波事敗、由中山道西走京師、沿途洶擾。一橋公慶喜、將據彥根而遏之。公爲水戸烈公子。彥根藩以櫻田故、與水戸氏相仇視。或謀侯公至而刺之、藩老臣大憂不知所爲。先生因自請、星馳抵大津、謁公軍前詭言、聞武田改逕越前。公不須進兵以滋事端也。是時先生實未審武田蹤跡、特設辭以濟一時之急。意謂武田若直赴京師、將以一死謝其罪也。已而武田果逕越前、公亦不抵彥根。因

得無事。其機警果敢有如此者。明治二年、以徵士入東京、累進太政官・大書記官、敘正五位。爲三條・大久保二公所信任、常參機密。大久保公遇刺之明年、先生年四十二、挂冠而去、專研臨池。其明年、清國楊惺吾、以參贊星軺、來駐東京。惺吾受金石之學於潘孺初。其東渡多携碑帖・精本。先生與巖谷一六・松田雪柯二君就而問焉。初先生獲菱湖眞蹟喜之。雖逮菘翁之世、未甚重其書。比知其可重、則菘翁已亡。乃訪其門人、百方得其遺訣。謂宜舍集帖而學原碑。學原碑宜參之眞蹟。眞蹟雖少佳者、我入唐諸公之書具存。益以寫經、進而尋繹石刻意致所由、未難溯古法也。於是規撫光明藤后・空海・逸勢諸名蹟、盡得唐法。及見惺吾、屏去舊習、書法日長。廿四年、遂航江浙、廣觀古器舊拓、與俞曲園・吳憲齋・楊見山諸人締交。而書名震於海外矣。既歸弟子益進。先生好游、寰內佳山水莫不造訪。每游乞書者麤至。殆乎欲爲鐵門限。其各體書、皆風靡一時、大抵其用筆、宗北碑之峻拔、而結構則采唐初之端整。雖晚歲之作、秀潤妍妙、不流枯渴。蓋其用心良苦、有匪夷所思者。每教人謂、人品須高、師法須古。運規矩於自然、寓雄奇於靜穆、斯得眞趣而到古人矣。清國羅叔蘊、評其書謂、得力北碑、而無施裘之氣。一生書丹之石不下千數。奉勅所書大久保公神道碑最爲傑作。先生稟性和夷、喜獎掖後進。談書會・大同書會之興、莫不推先生爲盟主。大正六年、年八十、門下士開壽筵於東京。四方名士

來會者數百人。蓋自古書人、未有若先生之盛也。十一年一月廿

七日、病卒。享年八十五。先卒朝旨、特陞敍從四位。葬於東京西

郊世田谷豪德寺塋域。夫人無子、養巖谷君子辨二郎、配以女子。

子承家爲內務技師・工學博士、晚生二男。曰旦三、醫學博士。

曰環、別起家。五女皆適人。頃門人故舊、醖資建碑豪德寺中以

圖不朽、屬余以銘。余兩世辱交先生。不可以不文辭也。乃系銘

曰、

書於六藝、豈云末技。尚矣籀斯、篆隸鬱起。鍾王接踵、

姿媚方軌。含規孕矩、窮極奧旨。搨摸跡漫、刻雕板爛。龍跳

虎臥、盡經塗竄。殘膏賸馥、雲消冰渙。翰墨之統、脆如朽貫。

孰振墜緒、挽茲頽爛。魏象梁闕、鋒穎未刊。旃裘蒙茸、竟

愈廢紉。成爲風氣、嘉道已還。天朝藻翰、根乎六代。奇古毛碑、

深醕象背、三娘雄強、三筆逸態。崧翁取範、力闢蕪穢。矯々

先生、眼曠千年、撫彼磨厓、融我殘牋、方員弗區、突過前賢。復乎

魏晉、可續斷絃。墨漆紙輝、窮神盡思。研幾已深、法度已備。

五十餘載、悠然建幟。落々大師、出類拔萃。末流汎濫、逆睹

其弊、循々善誘、無隱眞諦。山阻水涯、儼存鴻製。凡厥後學、服膺

勿替。

陸中内藤虎撰

昭和八年十月

集鳴鶴先生書 野村保泉刻

〔訓読〕

鳴鶴日下部先生碑銘

正二位大勲位公爵西園寺公望篆額

明治初年、書法を以て家に名づくる者は、率ね巻菱湖の風を承  
け、便娟柔媚を以て相ひ尚ぶ。其の時史の習氣を屑しとせざ  
る者は、則ち頗る法を貫名崧翁に取り、唐蹟に浸淫す。是の時に  
当たり、世を挙げて称して大家と爲す者に三君有り。曰はく長  
三洲、曰はく巖谷一六、曰はく日下部鳴鶴。長君は八法を以て  
至尊に授け、矜慎して多く書を作らず。巖谷君と日下部先生と  
は、則ち唐蹟由り北碑に溯洄し、長鋒廻腕を用て旧法を一変す。  
巖谷君の書は、險側にして姿多く、天分を以て勝る。日下部先生  
は、尤も書学に深く、兼ねて碑帖を綜べ、工力并せ臻る。加ふる  
に寿考を以てし、屹として一代の宗師と爲る。其の緒論は今に至  
るまで学書の家を沾句す。先生、諱は東作、字は子暘、別に鳴鶴  
と号す。近江彦根の人なり。本姓は田中氏、考を総右衛門と曰ひ、  
世よ井伊侯に仕ふ。妣は某氏、先生は其の第二子なり。天保九年  
八月十八日を以て、藩の江戸邸中に生まる。既に長じて同藩士日

下部三郎右衛門、諱は令立の養ふ所と為り、配するに其の女を以てす。万延庚午、井伊侯は桜田門に遭難し、三郎右衛門君も焉に殉ず。先生少くして郷人田中芹坡に従ひて学び、又た槍法を修む。其の家を嗣ぐや井伊氏新たに削封せられ、藩士尽く禄を減ぜらるるに遭ひ、備さに艱苦を嘗む。会たま水戸士の武田耕雲斎、筑波に挙兵して事敗れ、中山道由り西のかた京師に走り、沿途洶擾す。一橋公慶喜、将に彦根に抛りて之を遏めんとす。公は水戸烈公の子為り。彦根藩は桜田を以ての故に、水戸氏と相ひ仇視す。或ひと公の至るを候ひて之を刺さんことを謀り、藩の老臣大いに憂ひて為す所を知らず。先生因りて自ら請ひ、星馳して大津に抵り、公の軍前に謁して詭りて言ふ、武田改めて越前に還ると聞く。公兵を進めて以て事端を滋すことを須ゐざるなり、と。是の時先生、実に未だ武田の蹤跡を審らかにせざるも、特に辞を設けて以て一時の急を済ふのみ。意に謂へらく、武田若し直ちに京師に赴かば、将に一死を以て其の罪を謝せん、と。已にして武田果たして越前に還り、公も亦た彦根に抵らず。因りて事無きを得たり。其の機警果敢なること此くの如き者有り。明治二年、徴士を以て東京に入り、太政官・大書記官に累進し、正五位に叙せらる。三條・大久保二公の信任する所と為り、常に機密に参ず。大久保公 刺に遇ひし明年、先生 年四十二にして、挂冠して去り、

専ら臨池を研く。其の明年、清国の楊惺吾、星軺を参贊するを以て、来たりて東京に駐す。惺吾 金石の学を潘孺初に受く。其の東渡するや多く碑帖・精本を携ふ。先生 巖谷一六・松田雪柯の二君と就ひて問ふ。初め先生 菱湖の真蹟を獲て之を喜ぶ。菴翁の世に逮ぶと雖も、未だ甚しくは其の書を重んぜず。其の重んずべきを知るに比んでは、則ち菴翁已に亡し。乃ち其の門人を訪ね、百方に其の遺訣を得たり。謂へらく、宜しく集帖を含きて原碑を学ぶべし。原碑を学びては宜しく之を真蹟に参ずべし。真蹟佳なる者少なしと雖も、我が入唐の諸公の書 具さに存す。益するに写経を以てし、進んで石刻の意致の由る所を尋繹すれば、未だ古法に溯ること難からざるなり、と。是に於いて光明藤后・空海・逸勢の諸名蹟を規撫し、尽く唐法を得たり。惺吾に見ゆるに及び、旧習を屏去し、書法日びに長ず。廿四年、遂に江浙に航し、広く古器旧拓を觀、俞曲園・吳憲齋・楊見山の諸人と交はりを結び、而して書名海外に震ふ。既に帰りて弟子益ます進む。先生 游を好み、裏内の佳山水、造訪せざるは莫し。游ぶ毎に書を乞ふ者麤至し、殆んど鉄門限為らんと欲す。其の各体の書は、皆な一時を風靡し、大抵其の用筆は北碑の峻拔を宗とし、而して結構は則ち唐初の端整を采る。晩歳の作と雖も、秀潤妍妙にして、枯渴に流れず。蓋し其の心を用ふること良に苦にして夷の

思ふ所に匪ざる者有り。毎に人に教へて謂へらく、人品須らく高かるべし、師法須らく古なるべし。規矩を自然に運らし、雄奇を静穆に寓すれば、斯に真趣を得て古人に到らんと。清国の羅叔瀝其の書を評して謂へらく、力を北碑に得て旃裘の氣無し、と。

一生の書丹の石は千数を下らず、勅を奉じて書する所の大久保公神道碑は最も傑作為り。先生性を稟くること和美にして、喜んで後進を奨掖す。談書会・大同書会の興るや、先生を推して盟主と為さざるは莫し。大正六年、年八十、門下の士寿筵を東京に開くや、四方の名士來会する者数百人なり。蓋し古自り書人未だ先生の若き盛んなること有らざるなり。十一年一月廿七日、病にて卒す。享年八十五。卒するに先だち朝旨あり、特に從四位に陞叙せらる。東京西郊の世田谷の豪徳寺の塋域に葬らる。夫人子無く、巖谷君の子辨二郎を養ひ、配するに女子を以てす。子家を承けて内務技師・工学博士と為る。晩に二男を生む。且三と曰ひ、医学博士たり。環と曰ひ、別に家を起す。五女皆な人に適ぐ。頃ごろ門人故旧資を贖して碑を豪徳寺中に建てて、以て不朽を図り、余に属するに銘を以てす。余兩世交はりを先生に辱くす。不文を以て辞すべからざるなり。乃ち銘を系て曰はく、

書は六芸に於いて、豈に末技と云はん。尚しきかな摘斯、篆

隸鬱として起こる。鍾王踵を接し、姿媚軌を方ぶ。規を含み矩を孕み、奥旨を窮極す。搨摸跡漫し、刻雕板爛す。龍は跳り虎は臥すがごときも、尽く塗竄を経たり。殘膏賸馥は、雲のごとく消え氷のごとく渙く。翰墨の統、脆きこと朽貫の如し。孰か墜緒を振ひ、茲の頽爛を挽くや。魏象梁闕、鋒穎未だ刊られず。旃裘蒙茸、竟に廢紼に愈るのみ。風氣と成り為るは、嘉道已還なり。天朝の藻翰は、六代に根ざす。奇古の毛碑、深醇の象背、三娘の雄強、三筆の逸態。崧翁範を取り、力めて蕪穢を闢く。矯々たる先生、眼は千年を曠しうし、彼の磨厓を撫し、我が殘牋に融し、方員区らず、前賢を突過す。夙かなるかな魏晉、斷絃を續ぐべし。墨漆く紙輝き、神を窮め思ひを尽くす。研幾已に深く、法度已に備はる。五十余載、悠然として幟を建つ。落々たる大師、類を出でて萃を抜く。末流汎濫し、其の弊を逆睹するも、循々として善く誘き、真諦を隠す無し。山阻水涯、儼として鴻製を存す。凡そ厥れ後学は、服膺して替つること勿かれ。

陸中内藤虎撰

昭和八年十月

鳴鶴先生の書を集む

野村保泉刻

## 〔現代語訳〕

明治の初年、書法によつて世に知られる者は、大概みな卷菱湖の書風を継承し、その美しく流麗な書体を尊重していた。しかしそうした時の習慣を快く思わない者もあり、その多くは書法を貫名菰翁から取り、しだいに唐蹟に親しんでいった。この時ちょうど世の人々が書の大家と称した者が三人いた。すなわち長三洲、巖谷一六、日下部鳴鶴である。長君は八法によつて明治天皇に書法を伝授し、また謹巖をもつて慎み、むやみやたら書を多く創作することはしなかった。巖谷君と日下部先生はともに唐蹟から北碑に溯つて探究し、長鋒廻腕法を用いて旧法を一変させた。巖谷君の書は特異な書体であり、かつその表現も多彩であるが、天性の才により勝れていた。一方、日下部先生はとりわけ書学に造詣が深く、多くの碑帖をまとめ統一し、その技術と力量とがともに備わっていた。さらに長寿が加わり、先生は高くそびえ立つ山のごとく、人々の尊敬を一身に受けたのである。そして先生の書論は、現在に至るまで書を学ぶ人々の家をその恩恵で満たしているのである。

日下部先生は、諱を東作、字を子暘といい、別に鳴鶴と号した。近江彦根の人である。本姓は田中氏、先考を総右衛門といい、代々井伊侯に仕えた。妣は某氏、先生はその次男にあたる。天保九

年（一八九三）八月十八日、彦根藩の江戸邸中で生まれた。成人を迎えて同藩士日下部三郎右衛門、諱は令立の養子となり、その娘を妻とした。

万延庚午の歳、井伊直弼侯は桜田門外の禍に遭い、三郎右衛門君もともに亡くなった。先生は幼少のころ、同郷の田中芹坡に就いて学び、また槍法も修めた。先生が家督を継ぐ時、ちょうど井伊氏は桜田の件によつて新たに石を削減されることとなり、藩士もみな俸禄を減らされるに及んだために、先生もまた多くの困難を余儀なくされたのである。

おりしも水戸士の武田耕雲斎が筑波山で兵を挙げたが、戦に敗れ、中山道を経由して西の京都へ向けて敗走しており、その道中は乱れ騒然としていた。そこで一橋公慶喜が彦根を拠点としてこれを防ごうとした。一橋公は水戸烈公の子である。しかし、彦根藩は先の桜田門での一件のために水戸氏と互いに敵視していた。そのため、ある者が一橋公が彦根に立ち寄るのを待ち受けて狙い襲おうと企てていた。藩の老臣たちは大いに憂慮したが、為す術がなかった。そこで先生は自ら進んで請い、その足で星のごとく急ぎ大津へ赴き、一橋公の軍前に謁見し、次のように偽って進言した。「武田はその進路を改めて越前に向かったと聞き及んでおります。公が自ら兵を進めてさらにこの騒動を広げる必要はあり

ますまい」と。この時先生は実はまだ武田の進路についてはつきりした確証はなかったのであるが、このような事態のため、あえて虚偽の進言を行い、それによって一時の急場をしのぐとされたのである。おそらく、武田がもし直ちに京師に赴いていたとすれば、自らの命をもってその罪を償っておられたであろう。ほどなくして武田は予想通り進路を越前へ向けさせ、慶喜公も彦根に立ち寄らず、それにより事なきを得たのである。世の中には、先生のごとき機転が働き、決断力のある人物もいるのである。

明治二年（一八六九）、先生は徴士として上京し、しだいに太政官、大書記官へと昇進を果たし、正五位に叙せられた。そして三条実美、大久保利通二公に信任され、常に機密に参加しておられた。しかし、大久保公が刺殺に遭った明くる年、先生は四十二歳で官を辞し、以後ひたすら書学の研究に身を投じられたのである。さらに、その明くる年、清国の楊惺吾が駐日大使の補佐として来日し、しばらくの間、東京に駐在した。惺吾は金石学を藩籀初より学んだ人物である。彼は来日にあたり、多くの碑帖と善本を携えてきた。先生は巖谷一六、松田雪柯の二君とともに彼に従って学び、とくに書法のことなどを質問した。

当初、先生は菰菱湖の真跡を手に入れて喜んでおられた。貫名菰翁の世になってからも、先生はいまだ十分にはその書の価値を

重んぜず、ようやくその真価を理解したころには、菰翁はすでにこの世にはいなかったのである。そこで先生はその門人たちを訪ね、各地で菰翁の遺訣を得たのである。それは次のようなものである。「集帖を置き、まず原碑を学ぶのがよい。原碑を学び、そして真蹟と較べるのがよい。真蹟にはすぐれて立派なものが少ないが、我が国の唐土に渡り学んだ人々の書はいずれも現存している。それゆえに、貴重な書蹟を模写してより一層深め、自ら進んで石刻の意趣の基づく所以を繰り返し追求すれば、いまからでも晋唐の古法に遡ることは決して困難なことではないのである」と。そこで先生は菰翁のいうとおり、光明藤后、空海、橘逸勢らの名蹟を手本として学び、それによってことごとく唐代の書法を会得するに至ったのである。また楊惺吾に面会してからは、古い習慣を脱却し、その書法は日増しに高まっていった。

明治二十四年（一八九一）、かくて江南の地に渡り、広く古器や旧拓を鑑賞し、俞曲園、吳憲齋、楊見山ら多くの文人・学者と交友を結び、先生の書家としての名声は海外に轟いたのである。このため、帰国後、入門を請う弟子がしだいに増えていった。先生は旅を好まれ、日本全国の名だたる山水の地には、ほとんど足を運ばれた。そして旅ごとに先生に揮毫を乞う者が群がって集まり、それはまるでかの鉄門限をなすかのようであった。

先生の各体の書は、いずれも一世を風靡したが、大抵、その用筆は北碑の峻拔な筆法を貴び、結構は初唐の端整さを用いておられた。晩年の作品であっても、すぐれて潤いがあり、そのうえ優美で奥深く、決して枯れ果てるといふことはなかった。おもうに、その心持ちはまことに苦心されており、それは常人の考えの到底及ぶものではなかった。先生は常に人に次のように教え諭しておられた。「人格は必ず高く持たねばならぬ、師法は必ず古法によらねばならぬ。書の法則を自然にめぐらし、素朴な力強さを静謐な和らぎのなかに宿してこそ、本当の興趣を得て古人に及ぶことができるのだ」と。清国の羅叔蘊は、先生の書を評して次のように述べている。「北碑に筆力を得ており、その書には乱雑な気が無い」と。先生が生涯にわたって揮毫された書丹は千を下らず、とりわけ勅を奉じて書した大久保公神道碑は最高傑作である。

先生は人柄が生来穏やかで、喜んで後進を導き助けられた。そのため、談書会・大同書会が設立されると、先生を盟主に推さない者はいなかった。大正六年（一九一七）、八十歳のとき、門下の人々が東京で寿筵を開いたが、各地の名士が数百人参集するという盛会であった。おもうに、古来より書を志す者で、いまだ先生のごとき隆盛を誇った者はいないのではなからうか。大正十一年（一九二二）一月二十七日、病を得て亡くなった。享年八五。

卒するに先だち、朝廷の御意志で従四位に叙せられた。東京西郊の世田谷にある豪徳寺の墓所に葬られた。夫人には男子が無く、巖谷君の子である辨二郎を養子として迎え、その娘を娶せた。その子は家を継ぎ、内務技師、工学博士となった。晩年には二男を生んだ。一人は且三といい、医学博士となった。もう一人は環といい、別に家を起こした。また五人の娘はいずれも他家に嫁いだ。近ごろ、先生の門人や旧友たちが、みな資金を出し合い、先生を顕彰する碑を豪徳寺に建ててその遺徳を不朽にしようと図り、私に銘文を依頼してきた。私は生涯にわたって先生と辱知の間柄であった。それゆえ不文だからといってそれを辞すことは到底できなかった。そこで銘文を作り、次のように記した。

書は六芸において、どうして小技といわれているのか。はるか昔、太史籀と李斯により、篆書と隸書が鬱勃として起こった。のち鍾繇と王羲之がこれを継承し、書の姿の柔美さが比肩した。ここにいたり、書の法則は十分に養われ、その奥義を究めたのである。しかしのちに臨摸が多く行われ、碑板が氾濫し、龍が跳り虎が臥すかのごとき力強きものが、ことごとく改竄されてしまった。その大いなる余沢は、雲のごとく消え、氷のごとく溶けてしまった。翰墨の伝統は、まるで朽ちた銭さしのごとくに脆弱なものとなってしまうたのである。いったい、誰がこの衰退した大業を救

い、腐敗した伝統を挽回するのだろうか。朝廷は、未だ鋭い矛先

もってそれらを削り改めることはせず、無秩序な法が、結局は廃れた伝統に勝っただけのことであった。再び風気を取り戻したのは、嘉道以降のことである。我が国に伝わるすぐれた墨跡は、いずれも六朝の書法に基づいている。それはたとえば、すぐれて古朴なる上毛の碑、深く素朴なる仏像の背銘、三娘の雄強さ、三筆のすぐれた風格などである。菰翁はそれらから範を取り、品が無く乱れた書法をつとめて退けてきた。志高き先生は、その眼は千年ものいにしえに向けられ、中国の磨厓を学び、我が国の殘簡に融和させ、書法を隔てることなく、先賢を超越した。こうして、はるかなる魏晉の書法は、ここでとぎれた絃を再びつなぐことができたのである。その書は、墨色が濃く紙も輝き、精神をつくし思いが表現しつくされている。また、書に対する研究は十分に深く、軌範もやはり備わっている。書を学んで五十余年、悠然として旗を建て一家を成した。穩和な大師は、他の書家よりすぐれ抜きんでていた。そのため、その末流は多く溢れたが、先生はその弊害を予見し、それら末流をも順序正しく導き、書の真理を隠すことはされなかった。山の険しき所や水辺にも、儼然としてそのすばらしき書品が残されている。およそ後学の者は、こうした教えや遺墨を常を守るように心がけ、決して捨て去ってしまったては

ならないのだ。

#### 〔注〕

(一) 西園寺公望 嘉永二年(一八四九)〜昭和十五年(一九四〇)。明治、大正、昭和期の貴族、政治家。通称は美丸、望一郎。号は陶庵、不読、竹軒。公家の清華家で右大臣の徳大寺公純の次男。のち同じ間柄の西園寺家の養子となる。幼少のころから漢籍に親しみ、詩文を作るのを楽しみとした。慶応三年十二月、王政復古により参与となり、ついで権中納言となる。戊辰戦争の時には、山陰道鎮撫総督、東征第二軍総督などを務めて戦った。明治三年から十三年までフランスに留学し、パリ大学に学んで法学得業士となる。帰国後、明治大学の前身である明治法律学校講師、東洋自由新聞社長となる。以後、伊藤博文の側近として、賞勲局総裁、法典調査会副総裁、枢密顧問官、貴族院副議長などを経て、第二次、三次伊藤内閣の文部大臣に就任した。のち同三十九年に第一次内閣、同四十四年には第二次内閣を組織した。内閣辞職後、大正元年年に優詔を受けて元老に列する。以後、松方正義の没後はただひとりの元老として、後継の首相の推薦や天皇の最高政治顧問を務めた。また、能書

家としても知られ、多くの碑文などに揮毫している。なお、中西氏『鳴鶴伝』の「比田井天来」の項（一一六頁）には「彼は井原雲涯の『鳴鶴先生叢話』の題字や鳴鶴碑の篆額を書いたし……」とあり、篆額は天来の代筆であるとする。

(二) 卷菱湖 安永六年（一七七七）～天宝十四年（一八四八）。江戸後期の書家。名は大任。字は致遠、起巖。通称は右内。初め弘斎、のち菱湖と号す。本姓は小山氏であったが、生地 of 越後国巻に因んで改めた。幼くして父を亡くし、家も傾いたため、十九歳の時に江戸に出て亀田鵬斎かめだほうさいの門を叩き、経書と詩文を学び、さらに書や小学を修めた。その書は、唐の歐陽詢に学んだといわれ、各体を善くし、とりわけ楷書を得意とした。その平明な書風は下町の庶民を中心に大流行し、文化、文政年間以降の江戸の書壇を市河米庵と二分した。また、米庵、貫名崧翁とともに、幕末の三筆と称せられる。明治においてもその影響は大きく、学校教育での教科書手本類の多くは菱湖の書風によるものである。門人には、大竹蔣塘、中沢雪城、萩原秋巖らがいる。著に『書法質疑』、『十体源流』がある。参考書に、春名好重氏『卷菱湖伝』（北井企画、二〇〇一年）がある。

(三) 便娟 その姿形が美しくなまめかしく、なよなよとして軽やかなさま。便娟に同じ。古くは『楚辞』大招に、「豊肉微骨、

體便娟。只」と見えており、王逸は「便娟、好貌也」と注する。

また書法用語としては、唐、李嗣真『書後品』中上品に、「至於衛杜之筆、流傳多矣。縱任輕巧、流轉風媚、剛健非有餘、便娟少儔匹」（南宋、陳思『書苑菁華』卷四「書品」、なお、娟を媚に作るテキストもある）と見えている。書法用語としての「媚」については、河内利治氏「歴代書品中の〈媚〉字述語用例の検討」（『書法美学の研究』汲古書院、二〇〇四年）を参照。

(四) 柔媚 やわらかでなまめかしく優美なさま。媚は、あでやか、なまめかしく美しい意。清、馮武『書法正伝』卷八に、「巉巉、字子山、康里人。博涉經史、刻意翰墨。正書師虞永興、草書師二王。筆畫柔媚、轉摺圓勁。名重一時、撰臨池九生訣」。

(五) 時史 当時の文人や書画家。史は、本来歴史などを記載する官であるが、ここでは書家、画家などの文人を指す。

(六) 習氣 習慣。習性。ならわし。後に広まった否定的な俗習を指すことが多い。ここでは慣習的に形成される書風を否定的に述べている。北宋、蘇軾「再和潜師」（七古）に、「東坡習氣除未盡、時復長篇書小草」。

(七) 貫名崧翁 安永七年（一七七八）～文久三年（一八六三）。江戸後期の儒者、書家、画家。阿波の人。本姓は吉井氏。二十七歳の時に遠祖の貫名氏に改めた。名は苞しげる。字は君茂、子善。

通称は政三郎、のち省吾、泰次郎と改めた。号は初め海屋、海客、晩年には菰翁を用いた。幼少のころより漢学、書画に親しみ、二十二歳のころ大坂に出て、懷徳堂の中井竹山に儒学を学び、やがて塾頭となる。のち長崎や江戸を中心に各地を遊学し、京都に私塾須静堂を開き朱子学を中心に教授した。晩年には京都岡崎、さらに下鴨に移り住み、賀茂御祖神社に奉仕した。その書は二王（王羲之、王献之）を基調としながらも、平安の古筆や三筆、とりわけ空海の書を敬慕し、唐様と和様を総合し、謹厳で洗練された書風と評される。それはのちに述べるように、鳴鶴に大きな影響を与えた。また、幕末の三筆の一人と称せられる。なお、こうした書壇の変遷について、神田喜一郎氏は次のように述べている。

明治初期の書壇は、いわば江戸末期の延長である。それには（一）市河米庵の流れに属するもの、（二）巻菱湖の流れに属するもの、（三）小島成斎の流れに属するもの、の三の大きな流派があった。そうしてこの三つの大きな流派が主として関東に栄えたのに対し、関西には主として貫名海屋の流れが盛んで、それに拮抗した。……菱湖の書風の流行は、必ずしも実用書道にとどまらず、巖谷一六、日下部鳴鶴、中根半嶺、成瀬大域、西川春洞のごとき、明治書壇に盛名を馳せた

大家も、最初はみな菱湖の書風を習ったものであった。……最後に貫名海屋の書風であるが、その門流は大半は京阪地方、ことに京都に多かった。……明治の初年、日下部鳴鶴は京都に出て、これらの諸家と交り、海屋の書法について聞く所があり、それから鳴鶴の書風に大きな変化を来した。一時鳴鶴も海屋の熱心な渴仰者であったのである。……ともかく海屋の書風は、菱湖のそれのごとくに天下を風靡するに至らなかったが、少数の有識者によって継承せられ、それが直接間接に明治、大正の書道に大きな影響を与えた。（明治初期の書壇、『書道全集』第二五巻、日本11、明治・大正、平凡社、一九五七年）。

（八）浸淫 次第に進む。次第に進み染まる。宋玉「風賦」に、「侵淫谿谷、盛怒于土囊之口」『文選』卷十三とあり、李善は「侵淫、漸進也」と注する。

（九）唐蹟 唐代の書蹟。

（一〇）長三洲 天保四年（一八三三）～明治二十八年（一八九五）。幕末、明治期の志士、漢学者、書家。本姓は長谷、単称して長という。名は茂。字は世章、秋史。三洲は号。豊後日田の人。医者であり漢学者であった長梅外の子。十二歳の時、広瀬淡窓の咸宜園の門を叩いた。幕末維新の際には、長州の奇

兵隊に入り、長州征伐、戊辰戦争にも参加した。維新後は新政府に出仕し、太政官権大史、制度局員となる。文部少丞の時に学制五編を起草した。以後、文部大丞、歴史課御用掛、宮内省御習書御用掛、文部省学務局長、侍読、宮内省の文字御用掛などを歴任した。四十六歳の時に官を退き、専ら詩書画を中心とする文人生活に入った。その書法は顔真卿の書法を墨守し、顔法の開拓者としても知られ、楊守敬の来日以後盛んであった六朝書道には関心を示さなかった。著作には、およそ二千首の漢詩を収めた『三洲居士集』十一卷（五冊、西東書房、一九〇九年）が没後に刊行され、近年、中島三夫氏により『三洲長芟著作選集』（中央公論事業出版、二〇〇三年）がまとめられた。また、同氏には『長三洲』（中島三夫発行、一九七九年）がある。

（一一）**巖谷一六** 天保五年（一八三四）〜明治三十八年（一九〇五）。幕末、明治期の書家、政治家。幼名は辨治、医者になってからは立的、のちに迂也と称し、明治政府出仕後に修と改めた。字は誠卿。号は一六。別に古梅、迂堂、金栗道人、吸霞楼、呑沢山人などと号した。近江水口の人。書を中沢雪城、漢学を皆川西園、医学を三角東園に学ぶ。幕末維新では三條実美を初めとする勤王家らと親交を結び、維新後は徴士議政官史官、

太政官内史となり、以後、内閣書記官、元老院議員、貴族院議員を歴任した。その書は、初め巻菱湖の風を学んだが、楊守敬来日後は、鳴鶴や松田雪柯とともに金石学を基礎とした六朝時代の書法を学び、独自の一六流を確立した。参考書には、富久和代氏『巖谷一六の書——生きた書を書く——』（四国大学、二〇〇二年）がある。

（一二）**八法** 運筆法の一つ。いわゆる永字八法を指す。楷書の基本運筆である八種の法則を「永」の字で説明したもの。王羲之の『蘭亭集序』の第一字に基づいたといわれる。

（一三）**至尊** 天子をいう。ここでは明治天皇を指す。原文が空格になっているのはそのため。

（一四）**矜慎** 謹厳にして慎重に行う。唐、薛逢「送沈单作尉江都」（七律）に、「少年作尉須矜慎、莫向樓前墜馬鞭」（『全唐詩』卷五百四十八）。また、本碑に近い用例としては、たとえば、清、江藩『国朝漢学師承記』卷二「沈彤」に、「彤述作矜慎、不輕意下筆」。

（一五）**溯洄** 流れを溯る。また、転じて探求する意。溯洄、沂洄に同じ。『毛詩』秦風「蒹葭」に、「溯洄從之、道阻且長」とあり、『毛伝』は「逆流而上、曰溯洄」と注する。

（一六）**北碑** 北朝の碑板。清朝初期は帖学が栄えたが、嘉慶、

道光年間を境にして、金石学の勃興に伴って碑学が起った。と

くに、阮元が『南北書派論』、『北碑南帖論』を著して以降、包世臣がそれを継いで『芸舟双楫』、『安吳論書』を著し、清末には康有為が包世臣の書論を批判継承して『広芸舟双楫』を著すに至って隆盛を迎えた。これら三家に共通するのは、いずれも北朝の碑、とりわけ北魏の碑を高く評価している点である。その書論は、日本においても、明治十三年、楊守敬の来朝に際してもたらされ、鳴鶴、一六、雪柯を通じて大いに流行した。これについては、内藤湖南に「北派の書論」（明治四十四年三月二十六日『大阪朝日新聞』のち『全集』第八卷、一九七〇年、に収む）がある。さらに碑学についての体系的な研究には、菅野智明氏『近代碑学の書論史的研究』（研文出版、二〇一一年）が詳を尽くしている。

(一七) 長鋒廻腕 回腕法のこと。腕法の一つ。五本の指で筆管を持ち、上腕を半月形に張り出す特殊な執筆法。楊守敬によって我が国に伝来し、主に鳴鶴が世に提唱した。

(一八) 險側 めずらしく特異なこと。書体が普通とは異なっている。

(一九) 多姿 その姿形が多種多様であること。多彩。三国魏、嵇康「琴賦」に、「既豐贍以多姿、又善始而令終」（『文選』卷

十八）。

(二〇) 天分 生まれつき備わっている才能。天賦。『世説新語』賢媛第十九に、「王江州夫人語謝遏曰、汝何以都不復進。爲是夫塵務經心、天分有限」。

(二一) 工力 巧みさ（技術）と力量。

(二二) 臻 きわまる。この上ないところまで達する。

(二三) 壽考 長寿。長命。『毛詩』大雅「棫樸」に、「周王壽考、遐不作人」。

(二四) 屹 高く聳え立っているさま。屹然。

(二五) 緒論 言論。ここでは鳴鶴の書論を指すのであろう。

(二六) 沾句 人々に恩恵を与える。句は、丐に通ず。『新唐書』卷二百一「杜甫伝賛」に、「殘膏賸馥、沾丐後人多矣」。

(二七) 總右衛門 田中惣右衛門。経歴については未詳。なお、中西氏『鳴鶴伝』（三頁）および「日下部鳴鶴人と書の軌跡」

（『墨』四十五号「特集 日下部鳴鶴」芸術新聞社、一九八三年）において、姓を「田口」とするが、これは誤りであろう。

(二八) 日下部三郎右衛門 文政五年（一八二二）〜万延元年（一八六〇）。彦根藩士。父は三郎右衛門令春。代々彦根藩物頭役を勤め、嘉永六年から供頭役となり、万延元年三月三日桜田門外の変にも供頭として侍していたが、その際に斬りつけら

れて負傷し、帰邸後に六十余日を経て死亡した。鳴鶴は二十二歳の時に養子となり、その長女琴子と結婚した。

(二九) 萬延庚午 井伊直弼が暗殺された「桜田門外の変」は万延庚申の歳(万延元年、一八六〇年)であり、庚午の記載は誤りである。恐らくは湖南の記憶違いであろう。なお、『湖南文存』もそのままである。

(三〇) 田中芹坡 文化十三年(一八一六)〜明治十五年(一八八二)。彦根藩校会頭。名は栄、君美。初め秀次郎と称す。芹坡はその号。また別に湖東、白鷗莊と号す。彦根藩儒中川祿郎に詩文を学び、上洛して猪飼敬所に儒学を学ぶ。さらに江戸に出て松崎謙堂の門人となる。のちに彦根に戻り、井伊直憲に認められて藩費「弘道館」の教頭を務め、明治元年には会頭となる。用掛を兼任し、明治二年に文館教授、同三年に学館の教頭に昇進した。

(三一) 備嘗艱苦 困難や苦勞を経験し尽くす。艱難辛苦。『春秋左氏伝』僖公二十八年に、「險阻艱難、備嘗之矣」。

(三二) 會水戸士武田耕雲齋……其機警果敢有如此者 この段について「小伝」は次のごとく述べる。

武田耕雲齋が常陸に事を舉げて成らず、兵を率ゐて西し、美濃路より西京に向はんとすとの情報があったので、慶喜公は

彦根に次して之を討つ考であつた、彦根藩士は櫻田の變から水戸を恨むこと甚しく、慶喜公が來たならば之を刺さんと謀るものがあつて、家老の連中は心配であるけれども、鎮壓の策を知らなかつた、岡本黄石翁が之を先生に謀つた、先生は自分に策があるが一任せらるゝならば急度果さうといはれた、黄石翁は喜んで先生に依託した、そこで先生は早馬で大津の營に至り慶喜公に謁し、耕雲齋は道を變じて越前に出ることを確めたから、公は彦根に入つて事を大きくするに及ばぬと説いて、其進發を中止させたので事無きを得、家老等も安堵したといふことだ、先生の此策は耕雲齋の實状を知つていふたのではなく、兎も角も慶喜公を彦根に入らせぬ考であつて、若しも耕雲齋が京に向つたならば、先生は直に割腹して罪を謝する覺悟であつたそうだ、其勇敢奇知は此一時にても知られる。

(三三) 武田耕雲齋 享和三年(一八〇三)〜元治二年(一八六五)。水戸藩士。本姓は源氏。名は正生。通称は修理、彦九郎。号は如雲。致士後、耕雲齋と号した。徳川斉昭に仕え、その藩主擁立などの功績を認められて参政に任じられ、藩政に参与した。しかし弘化元年、斉昭が幕府から謹慎処分を命じられると、耕雲齋もこれに強く抗議したため、連座で謹慎となつた。嘉永

二年、斉昭の復帰に伴って再び藩政に参与し、安政三年には執政に任じられた。斉昭の尊王攘夷運動を支持し、斉昭の藩政を支えた。元治元年、藤田小四郎らが筑波山で挙兵した天狗党の乱では、のちに合流して首領となったが、中山道、伊那路などを経て上洛の途中、加賀金沢藩に投降し、越前敦賀で斬首された。

(三四) 沿途 沿途に同じ。沿路。道中。

(三五) 洶擾 乱れ騒然とする。『宋書』卷一「武帝紀上」に、「穀敗問至、内外洶擾」。

(三六) 一橋公慶喜 徳川慶喜。天保八年(一八三七)〜大正二年(一九一三)。徳川十五代将軍、最後の征夷大将軍。水戸藩主徳川斉昭の七子。のち一橋家に迎えられる。十四代将軍の座を紀州藩主の徳川家茂と争って敗れる。のち家茂の急死に伴い、十五代代最後の将軍となる。幕政改革に着手したが、すでに情勢は切迫しており、打開策として大政奉還を行い政治体制の再編を図ったが、やがて将軍職を辞し江戸城を明け渡した。これにより江戸幕府は滅亡した。その後は静岡に隠棲し、明治三十年に上京し、明治天皇に謁見して名誉を回復し公爵となった。

(三七) 星馳 流星のごとく急ぎ行く。『晋書』卷六十六「陶侃伝」に、「近者王如亂北、杜弢跨南。二征奔走、一州星馳。其

餘郡縣、所在土崩」。

(三八) 事端 騒動。悶着。『晋書』卷三十一「文明王皇后伝」に、「會見利忘義、好爲事端」。

(三九) 設辭 言葉を述べる。措辞。『荀子』卷十八「賦篇」に、「弟子不敏、此之願陳。君子設辭、請測意之」。

(四〇) 機警 智恵が働く。頭の回転が速い。『三国志』卷一、魏書「武帝紀」に、「太祖少機警、有權數。而任俠放蕩、不治行業。故世人未之奇也」。

(四一) 果敢 思い切って行動する。決断力がある。

(四二) 徴士 政府に登用されて官についた藩士や庶民をいう。明治元年、各藩から藩士やとくに才能のある者を太政官に召し出し、朝廷の用を勤めさせた。鳴鶴は自身の登用について次のように述べている。

幕府倒れて明治政府起るや、時の政治の中心たる太政官の文書課には、幕府時代の唐様書きの人々が多く職を奉ずるやうになつた、巖谷、長松、菱田、北川及び吾輩などがそれである、されば詔勅、布告、命令、訓示、辭令等、凡て宮中府中の文書は、當時の唐様書たる我々が執筆仰せ付けられたのである(「明治年代の書風」中村不折・井土靈山『六朝書道論』二松堂書店、一九一四年)。

(四三) 累進 次第に官位が昇り進むこと。

(四四) 三條 三条実美。天保八年(一八三七)〜明治二十四(一八九一)。幕末明治期の公卿、政治家。梨堂と号す。正一位右大臣三条実万の四子。のち家督を継ぐ。安政六年、大老井伊直弼の弾圧によって、父実万が官を辞すことになってから、しだいに尊攘思想に傾いてゆく。のち尊王攘夷派の公卿として活躍し、一時、長州や太宰府に逃れたが、慶応三年、王政復古を機に上京し、翌明治元年、岩倉具視とともに政府の副総裁に就任した。同二年に内大臣、同四年には王政復古の功績が認められ、政府最高位である太政大臣となった。能書家としても知られ、鳴鶴は『叢話』において、三条実美について以下のごとく述べている。

條公は實に溫厚な君子人であつた、公卿の首班として尊敬せられた、其書は堂に入つたもので、専門家をして後へに瞠若たらしめられた、假名は行成を慕ふて清婉を極められた、吾輩は太政官在職中は常に愛顧を受け、漫然清世一閑人の七大字を揮毫して給つて、我が書齋の楣間に掲げて居る、続本の大扁額がそれである、是に由て我室を清閑堂と號したのだ。

〔三條實美公〕一五六頁

(四五) 大久保 大久保利通。天保元年(一八三〇)〜明治十

一年(一八七八)。幕末、明治初期の政治家。薩摩藩士。名は正助。また一藏ともいう。号は甲東。西郷隆盛、岩倉具視らと倒幕運動を推進し、明治政府を樹立した。維新後は、新政府の参議となり、木戸孝允らと版籍奉還、廢藩置縣を断行した。のち大藏卿、参議、内務卿を歴任し、地租改正、殖産興業政策などを推進した。また、元老院、大審院、地方官會議の設置による立憲制の樹立をめざしたが、西南戦争鎮圧の翌年、東京紀尾井坂で石川県士族島田一良らに暗殺された。大久保は鳴鶴にとつて最も心強い後ろ楯であつた。後述のように、明治四十三年、鳴鶴は精魂を傾け、半年を費やして「大久保公神道碑」を書き上げた。

(四六) 挂冠 冠を脱いで官を辞す。辞職する。後漢の逢萌が王莽に仕えるのを拒み、城門に冠をかけて立ち去つたという故事に拠る(『後漢書』卷八十三「逢萌伝」)。

(四七) 臨池 書を学ぶこと。後漢の張芝が池に臨んで一心不乱に書の稽古に励んだため、池の水がすっかり黒くなつてしまつたという故事に拠る(『晋書』卷三十六「衛恒伝」)。

(四八) 楊惺吾 楊守敬。清、道光二十年(一八四〇)〜中華民國三年(一九一五)。清末の地理学者、金石学者。名は守敬。惺吾は字。晩年には鄰蘇老人と号した。湖北省宜都の人。同治

元年（一八六二）の挙人。その翌年、会試受験のため上京した  
おり、潘存（孺初）に出会い彼に師事した。しかし、それは単  
に学問、書法にとどまらず、その『鄰蘇老人年譜』光緒五年の  
条によれば、生活上の恩人でもあったようである。光緒六年（一  
八八〇）、駐日大使の何如璋に招かれ、四年間東京に滞在した。  
その際に、日下部鳴鶴、巖谷一六、松田雪柯らに北派の書法を  
伝え、近代日本の書道界に大きな足跡を残した。また日本に残  
存する中国の善本や逸書を収集し、のちにその成果を『日本訪  
書志』や『古逸叢書』として刊行した。

（四九）**参贊** 参加して助ける。補佐する。『晋書』卷一百十九  
「姚泓載記」に、「君等参贊朝化、弘昭政軌」。

（五〇）**星輅** 使者の乗る車。ここでは使者の意。具体的には清  
国駐日大使である何如璋を指す。唐、宋之問「奉和梁王宴龍泓  
應教得微字」（五律）に、「水府淪幽壑、星輅下紫微」（『全唐詩』  
卷五十二）。

（五一）**潘孺初** 潘存。嘉慶二十三年頃（一八一八）〜光緒十八  
年（一八九二）。字は仲模、存之。孺初は号。広東省瓊州府文  
昌の人。咸豐元年（一八五二）の挙人。晩年は郷里に帰り、蔚  
文書院、蘇泉書院の主講を勤めた。その書はあまり多く伝世さ  
れていないが、歐陽詢「九成宮醴泉銘」の臨書は高く評価され

ており、北碑にも通曉していた。著に『楷法溯源』十四卷（潘  
原輯、楊守敬編、光緒四年刊）がある。北京滞在中の中林梧竹  
（一八二七〜一九一三）が師事したことでも知られる。

（五二）**精本** 善本。校勘や校訂などが精確に行われている典籍  
をいう。なお、楊守敬は来朝に際し、漢魏六朝の碑帖や法帖類  
一万二、三千点携えたという。

（五三）**松田雪柯** 文政六年（一八二三）〜明治十四年（一八八  
一）。幕末、明治期の書家。名は元修。字は公静、一に子踐。

幼名は慶太郎。通称は縫殿、また左近玖一郎。号は雪柯。別に  
澹所、聊得軒、山田逸農、紫芝堂、五芝主人と号す。伊勢山田  
（現在の三重県伊勢市）の人。松田元兆（適翁）の長男として  
生まれ、父に書法や漢学を習う。若くして、詩文を東夢亭、經  
学を猪飼敬所、斎藤拙堂に学ぶ。のちに上洛して貫名海屋の門  
に入る。安政六年、病を得て伊勢山田へ帰り、伊勢神宮の祠官  
となり、また山田学校教授に任ぜられた。明治十一年、神宮祠  
官を辞し、鳴鶴、一六の招きに応じて上京し、一六邸内の空家  
に寄寓していた。この頃から段玉裁の書法などを研究し、「述  
筆法堂清談会」を主宰した。明治十三年、来朝した楊守敬のも  
とで、鳴鶴、一六とともに師事して六朝書法を学んだ。著に『段  
氏述筆法』（松田雪柯書、矢土勝之編、鳳文館、明治十三年、

八十部の自費出版）があり、序文は鳴鶴、跋文は一六による。また、若年より晩年に至るまでの日記、「松田雪柯東都日記」十三冊が存する。詳しくは、

山本棠舟氏「幻の書家松田雪柯再考——菰翁と鳴鶴をつなぐ書道史的位地——」（『墨』臨時増刊「近代日本の書」、芸術新聞社、一九八一年）

山本棠舟氏・堀雅峯氏「初公開『松田雪柯日記』が語る近代書道の幕明け」（『墨』第七十六号、芸術新聞社、一九八九年）

杉村邦彦氏「楊守敬と松田雪柯・岩谷一六・日下部鳴鶴との交流——『松田雪柯日記』を中心として——」（『書学叢考』研究出版、二〇〇九年）

を参照。

（五四）先生……就而問焉 その背景について、鳴鶴は次のように述べている。

然るに明治十三年頃清國公使館附我が書風の上に一の變化劑が投ぜられた、楊氏は彼の國に在りて夙に潘存といふ名家に就て書法を修め、金石學は其の最も得意とする所であつた、楊氏來朝の後巖谷一六、松田雪柯及び吾輩の三人は、殆ど日課同様に楊氏の寓居を叩いて書法を問ふた、楊氏の書道に於けるは唯一の樂みであつて、熱心に懇篤に我々に教へて呉

れた、之れが日本に於ける六朝派の書風の渡來した抑の初めである（「明治年代の書風」）

また、この時の楊守敬との書法の筆談は『八稜研斎隨錄』（「真跡鳴鶴遺稿全集」第二卷、日本書道教育学会、一九六九年）に收められている。その詳しい経緯については、杉村氏前掲論文および同氏「楊守敬と日下部鳴鶴——近代中日書法交流史の発端——」（『書学書道史研究』第四号、一九九四年）に詳しい。

（五五）眞蹟 その人自身の手になる書や文字。眞筆。

（五六）門人 おもに菰翁門下の松田雪柯、越智仙心らから聞いたということが『叢話』に収める「貫名菰翁の名言」に述べられている。

（五七）百方 各地。各国。「梁中書侍郎虞蘇論書表」に、「百方譬說、不能得」（張彦遠『法書要錄』卷二）。

（五八）遺訣 先人が遺した要訣。遺言。

（五九）謂宜舍集帖而學原碑……未難溯古法也 以下の菰翁の言は、『叢話』に収める「貫名菰翁の名言」に基づくものである。すなわち次のごとくいう。

貫名先生が常に門下に語られたと云ふ、名説を人傳に聴くに及んで、是あるかな是ある哉と、大に悟る所があつた、其の説と云ふのは大略恁うなのだ、書を研究するには、結局原碑

に就いてするか、集帖に就いて學ぶとか云ふ事になる、それは人に依つては一得一失の議論もあらうが、先生は概して集帖を好まず、専ら力を原碑に注がれた、其の理由は、集帖の最も缺點とする所は、長い歳月の間幾回となく、複刻重版を経來つた爲め、筆者其の人の精神氣魄筆意形體の美は、殆んど失はれてゐるから、到底信を措く事は出來ぬ、其處へ行くと原碑の方は、千百年を経て、假令風雨の爲に多少の缺損磨滅の厄を免れなかつたとは云へ、古人の眞蹟を其の儘石に刻し、僅かに肉筆と紙一重を隔てた許りであるから、形體の美、氣魄の妙、何等疑念を挾む所なく、確信を以て研究の歩を進める事が出來ると云ふのだ……そこで更に語を次いで曰く、眞蹟が見出し難き以上、原碑の干物に生命の息を吹き込んで、自ら活かして學ぶ事が必要である、日本に於ても古來、空海逸勢の如きは身親しく唐に入つて、古法の直統を傳へてゐる、又光明皇后の御書、及當時の古寫經などにも、往々正統の古法を窺ふことが出來る、恁かる眞蹟を熟覽玩味し、加ふるに原碑と照應融化して學べば、學者必ず誤ること尠なく益を得ることが多いであらう

(六〇) 集帖 単帖に対して、複数の書家の名跡を集めて石や木などに刻した法帖をいう。また、彙帖、叢帖ともいう。代表的

なものとして、宋の『淳化閣帖』十卷がある。

(六一) 入唐 唐(中国)に使者として行く。入唐使。

(六二) 尋繹 道理を研究する。尋ね窮める。『漢書』卷八十九「循吏伝」(黄霸伝)に、「米鹽靡密、初若煩碎。然霸精力能推行之。吏民見者、語次尋繹、問它陰伏、以相參考」とあり、顔師古は「繹、謂抽引而出也」と注する。

(六三) 意致 おもむき。意趣。風致。南朝陳、徐陵「与李那書」に、「至如披文相質、意致縱橫、才壯風雲、義深淵」。

(六四) 規撫 模倣する。手本とする。

(六五) 光明藤后 大宝元年(七〇一)〜天平宝字四年(七六〇)。

光明皇后。名は安宿媛、光明子ともいう。聖武天皇の後。聖武天皇とともに奈良時代を代表する書家。その現存している書として「樂毅論」、「杜家立成雜書要略」がある。

(六六) 空海 宝龜五年(七七四)〜承和二年(八三五)。平安初期の僧侶。真言宗の開祖。書家としては、朝野魚養に書を学んだとされ、王羲之の影響を受けている。遣唐使として唐に渡つてからは、韓方明に書を学んだとされる。その著名な書として「風信帖」、「灌頂歴名」などがある。

(六七) 逸勢 ? 承和九年(八四二)。橘逸勢。平安初期の官人、書家。橘諸兄の曾孫。延暦二十三年(八〇四)、空海、最

澄とともに、平安最初の遣唐使として渡り、二年間滞在した。

柳宗元に書法を学んだともいわれる。帰国後、官位は進まず、嵯峨天皇が亡くなると謀反の疑いで捕らえられ、伊豆に流罪となる途中に遠江で病没した。空海、嵯峨天皇とともに平安の三筆と称せられる。「伊都内親王願文」や「興福寺南円堂銅燈台銘」などの書が伝えられるが、確実な根拠はない。

(六八) 屏去 取り除く。捨て去る。『宣和画譜』卷二、道釈二「吳道玄」に、「道子使曼屏去縷服、用軍装纏結」。

(六九) 廿四年、遂航江浙……而書名震於海外矣 この旅について、鳴鶴は『学書経歴談』において次のごとく述べている。

明治廿四年支那二一遊シ。彼我兩國ノ書風ノ異同ヲ講究シテ見マスルニ。概シテ彼力書ハ沈書渾厚。我ノ書ハ流滑纖麗ニシテ。自ラ書風ノ上ニ大陸ト一島國ノ氣象ヲ顯ハスカ如ク。中心慨歎ニ堪ヘ又思ヒテアリマシタ。ソレカラ蘇州ニ到リ。吳大澂ニ交リ。殷周秦漢ノ古器銘ヲ多々見ルコトヲ得テ。三千年外大小二篆ノ高妙ヲ窺ヒ。又楊見山ニ遇フテ。漢隸ノ法度ヲ聞キ。篆ハ円勁古雅隸ハ方勁古拙ヲ以テ極致ト爲スコトヲ悟リ。唐隸明隸ノ判然途ヲ殊ニシテ。學フニ足ラサルヲ知リ。又從來我邦人ノ篆隸ニ一モ古法ナク。皆優孟ノ冠ナルコトヲ看破スルニ隨ヒ。深く自ラ戒ムヘキ所以ヲ知り得マシタ。

實ニ此行ハ私力爲ニ一大有益ノ事テアリマシタ。

また、この際の清人との交流については筆談が残されており、それらは『鳴鶴禹域遊草・筆談』（『真跡鳴鶴遺稿全集』第五卷、日本書道教育学会、一九六九年）に収められている。

(七〇) 江浙 江蘇省と浙江省。江南の地。

(七一) 俞曲園 俞樾。道光二年（一八二二）〜光緒三十三年

（一九〇七）。清末の考証学者。字は蔭甫。曲園と号す。浙江省徳清の人。道光三十年（一八五〇）の進士。この時の試験官であつた曾国藩から大いに賞賛され、翰林院編修、国史館協修となり、咸豐五年（一八五五）には河南学政提督となつた。のち蘇州に隠居し、専ら經学を修め、晩年には杭州の詒経精舎の主講となつた。学風は王念孫、王引之父子を継承し、門人には章炳麟、吳昌碩などがある。また、我が国の江戸から明治初期の漢詩およそ五三〇〇首を収めた『東瀛詩選』（四十卷、補遺四卷、明治十六年刊）を編纂するなど日本との関係も深い。伝は『清史稿』卷四百八十二「儒林三」に立てられている。

(七二) 吳憲齋 吳大澂。道光十五年（一八三五）〜光緒二十八年（一九〇二）。清末の金石学者、書家。字は止敬。清卿、恒軒と号す。江蘇省吳県の人。同治七年（一八六八）の進士。翰林院編修、河北道、太僕寺卿、左副都御史など経て、光緒十二

年（一八八六）、広東巡撫に拔擢された。書は篆書に通じ、古銅器、古玉の研究で知られる。金石学関係の著書も多く、とりわけ『説文古籀補』十四巻が名高い。また数多の古銅器を精印し、『憲齋集古録』として刊行した。伝は『清史稿』巻四百五十に立てられている。

（七三）楊見山 楊峴。嘉慶二十四年（一八一九）〜光緒二十二年（一八九六）。字は見山。号は季仇。晩年には藐翁、遲鴻殘叟などと号した。浙江帰安の人。たび重なる科挙の落第を経て、咸豐五年（一八五五）に挙人となる。曾國藩や李鴻章の幕客となり、阿片戦争や太平天国の乱の鎮圧に参加した。同治元年（一八六二）、浙江での騒乱によって、二人の息子を失い、次男の鴻熙は行方不明、さらには自宅が全焼し、蔵書や著作はすべて灰燼に帰してしまった。このとき楊峴は上海にいて難を逃れたが、生き残ったのは妻と次女だけであった。これ以後、鴻熙の帰りを待ち望むという意を込めて遲鴻殘叟と号した。このように公私ともに恵まれない生涯であった。学問としては、金石学、小学に精通し、詩文をよくし、隸書に長じ、とりわけ漢碑を得意とした。著に『庸齋文集』、『遲鴻軒詩鈔』がある。

（七四）弟子益進 『史記』卷四十七「孔子世家」に、「孔子自周反于魯、弟子稍益進焉」。

（七五）好游 鳴鶴が旅を好んだことについては、『叢話』に「漫遊」の項（二三頁）があり、明治十四年から大正十年にかけての旅行先が記されている。四十一年間のうち、旅に出なかったのは四年ほどで、ほぼ毎年、年に複数回旅行している。このことについて、門弟井原録之助は『叢話』において次のごとく述べている。「先生は斯の如く連年筆硯を載せて出遊し、足跡殆んど天下に遍く、其往く處で土地の好事者の歡待を受け、收藏家あれば其書畫を觀るを樂みとせられ、また圍棋を善くして閑に棋敵を呼び、客來らざる時は古詩を寫されることが多かった」。

（七六）寰内 天子の治める領土全体をいう。ここでは日本全体を指す。『春秋公羊伝』隱公元年冬十二月の伝に、「寰内諸侯、非有天子之命、不得出會諸侯」とあり、范寧は「天子畿内、大夫有采地、謂之寰内諸侯」と注する。

（七七）麇至 群がってやつて来る。麇は、麇の籀文で、群がる意。『春秋左氏伝』昭公五年に、「求諸侯而麇至」とあり、杜預は「麇、羣也」と注する。

（七八）鐵門限 隋の智永禪師（名は法極。会稽の人。王羲之より七代の子孫）は、彼に書を求める人が多く、それによって敷居が踏み潰されたので、これを鉄の薄い板で包んだ。これによ

り人々は「鉄門限」と呼んだという故事に拠る（李綽『尚書故実』）。

（七九）用筆 筆法。筆づかい。

（八〇）北碑之峻拔 峻拔は、力強く勢いがあり、他より抜きんでていること。これは北碑の書体が全て楷書であり、それは現在とは異なり、極めて角ばった運筆を多用し、鋭く雄渾な書体によるためである。一般にはこれを「六朝楷書」と呼んでいる。

（八一）結構 点画の組み合わせ方や形のとり方。すなわち、書の構成や構造をいう。結体ともいう。

（八二）唐初之端整 初唐の書法において、最も傑出したのは楷書であり、六朝期の洗練を経て大成した。多くの書家を輩出したが、とりわけ、歐陽詢、虞世南、褚遂良が「初唐の三大家」と呼ばれすぐれている。

（八三）秀潤 すぐれた潤いのある美しさ。書画などがすぐれていきいきとしている。『宣和書譜』卷八「蔡凝」に、「而字畫秀潤、風致尚可以追歩」。

（八四）妍妙 優美で奥深い。唐、孫過庭『書譜』に、「況云積其點畫、乃成其字、曾不傍窺尺牘、俯習寸陰、引班超以爲辭、援項籍而自滿、任筆爲體、聚墨成形、心昏擬效之方、手迷揮運之理。求其妍妙、不亦謬哉」とある。妙は、はかりしれない本

質をいう語。『老子』第一章に、「無名天地之初、有名萬物之母。故常無欲以觀其妙。」とあり、河上公は「妙、要也。人常能無欲、則可以觀道之要。要謂一也」と説き、王弼は、「妙者、微之極也」と注する。

（八五）枯渴 枯れきって潤いがない。この語は、先の秀潤、妍妙に欠けることをいう。

（八六）人品須高、師法須古 南宋、姜夔『続書譜』『風神』に、「風神者、一須人品高、二須師法古、三須紙筆佳、四須險勁、五須尚高明、六須潤澤、七須向背得宜、八須時出新意」とある。なお、ここで姜夔がいう風神とは、風骨、風姿、風度などと同類の語で、内から引きしめる精神的な格調の高さを意味する。この語は六朝期の人物評などで多く見られ、たとえば『南史』卷二十八、褚回伝に、「援琴奏別鵠之曲、宮商既調、風神諧暢」とあるごとく、芸術批評の語である。書においても、やはりこの「風神」の語を最上位に置いたことは、唐、張懷瓘の『書議』に、「以風神骨氣者居上、妍美功用者居下」（『法書要録』卷四）と見えることからわかる。

（八七）運規矩於自然……到古人矣 「小伝」（『叢話』一五頁）には、鳴鶴が「運規矩於自然得真趣、寓雄奇於靜穆到古人」と書して井原録之助に贈ったことが記されている。またそこには、

この句が、清、曾国藩の「寓沈雄於靜穆、乃有深味」の語に基づくところ。この語は『求闕齋日記類抄』に、「作字之道、寓沈雄於靜穆之中、乃有深味。雄字須有長劍快戟、龍拏虎踞之象。鋒鋌森森不可逼視者、爲正宗。不得以劍拔弩張四字相鄙。作一種鄉愿字、名為含蓄深厚。非之無舉、刺之無刺、終身無入處也。作詩文亦然、作人又何莫不然」（辛酉十二月）と見えている。

曾国藩の書論については、鳴鶴筆写の「求闕齋日記類鈔々録」（『鳴鶴學書要録』に影印を収む）が残されており、後に『鳴鶴先生行書曾國藩書論』（清雅堂、一九三七年）も出版されている。

（八八）規矩 規は、円を画くぶんまわし。矩は、方形を画くさしがね。転じて、法則、規範をいう。『孟子』離婁上に、「不以規矩、不能成方員」。

（八九）自然 人の手が加わらない、ありのままの姿。天然。人工、技巧に対する語。『老子』に散見し、たとえば、第二十五章には「人法地、地法天、天法道、道法自然」とあり、河上公は「道性自然、無所法也」と注する。

（九〇）雄奇 雄大ですぐれている。奇は、ふつう奇異というように否定的な意味合いに解されることが多いが、ここではすぐれて卓抜した意に捉えられている。楊守敬『激素飛清閣評碑記』

「華岳頌」に、「余所見北周人書、有魏人之寒瘦、無雄奇宕逸之致」と見える。また、鳴鶴は「楊守敬と潘存とに就いて」において、「さて六朝書の佳處は、韻が高くして力が強く、雄奇を靜穆に寓するを以て妙とする、其短處は字が粗笨で、奇僻寒險の病があることを知らねばならぬ」（『叢話』四五頁）と述べる。

（九一）靜穆 静謐で穏やかなさま。

（九二）羅叔蘊 羅振玉。同治五年（一八六六）〜民國二十九年（一九四〇）。清末、民國初年の考証學者、金石學者。字は叔言、叔蘊。雪堂、貞松などと号した。祖先は浙江上虞の人であるが、曾祖父の時に江蘇淮安に移住した。若くして考古學に没頭し、のちに張之洞に教えを請い、宣統元年（一九〇九）に參事官となり、京師大學堂農科監督を兼任した。同三年、辛亥革命が勃發すると、旧友である内藤湖南、狩野直樹、富岡桃華（鉄齋の子）らの勧めにより、一族の王国維ら二十数名とともに日本に亡命し、京都で金石學の研究に専念した。その學問は、金石學、甲骨學をはじめとして、校勘、輯佚學、板本、目錄學など多岐にわたり、とりわけ敦煌文書の保存、研究に尽力した。膨大な著作があるが、それらは『羅雪堂先生全集』一四〇冊（全七編、台北文華出版公司、台北大通書局景印、一九六八〜七六

年)にまとめられている。なお、羅振玉の鳴鶴評については出典未詳。

(九三) 旃裘 西北方の遊牧民族が織った毛皮の衣服。転じて、乱雑、無秩序なさまをいう。『史記』卷一百一十「匈奴列伝」に、「自君王以下、咸食畜肉、衣其皮革、被旃裘」。

(九四) 書丹 もとは碑を建立する際、文字を刻す前に朱を用いて直接石面に下書きをすることをいうが、ここでは石材に文字を書くこと。丹は、朱の意。また丹書ともいう。後漢の蔡邕が熹平石経を建てる時に下書きを丹朱で行なった故事に拠る。『後漢書』卷六十下「蔡邕列伝」に、「熹平四年、乃與五官中郎將堂谿典、光祿大夫楊賜、諫議大夫馬日磾、議郎張馴韓說、太史令單颺等奏、求正定六經文字。靈帝許之。邕乃自書丹於碑、使工鐫刻立於太學門外」。

(九五) 大久保公神道碑 明治四十三年、勅命によって東京、青山靈園に建てられた大久保利通の顕彰碑。篆額は伏見宮貞愛親王、撰文は重野成斎。字大五糧角、総字数二九一九字。これは我が国最大の楷書碑であり、また鳴鶴の最高傑作と称される。鳴鶴は大倉財閥の別荘を半年にわたって借り受け、加賀山中温泉で一五〇日を費やして書した。なお、神道碑とは墓所の墓道に建てる頌徳碑のこと。

(九六) 稟性 生まれつきの品性、性質。天性。『後漢書』卷三十下「郎顗襄楷列伝」(郎顗伝)に、「臣備生人倫視聽之類、而稟性愚慤不識忌諱」。

(九七) 和夷 見かけない語であるが、文意から推して、穏やかなさま、と解した。夷は、たとえば『毛詩』召南「草蟲」に、「亦既見止、亦既覯止、我心則夷」とあり、『毛伝』は「夷、平也」と注する。

(九八) 獎掖 奨励して助ける。

(九九) 談書會 明治四十年六月に設立された書会。発端は前田黙鳳が鳴鶴、中林梧竹、徳富蘇峰らに働きかけたことによる。鳴鶴、近藤雪竹、河井荃廬、阪正臣、中村不折ら十一名が幹事となり、会員数は四百名以上であった。機関誌として『談書會誌』、『談書會集帖』を発行した。また楊守敬ら中国の書論書も多く刊行している。それらの一部は、『和刻本書画集成』第三卷(汲古書院、一九八八年)に収められている。

(一〇〇) 大同書會 大正六年五月、日本橋俱樂部において鳴鶴八十歳の寿筵が開催され、文人、門下三百余名が参集した。これを機に大同書会を創立し、鳴鶴が会頭となり、機関誌『書勢』(井原録之助編)を発行した。

(一〇一) 大正六年……門下士開壽筵於東京 鳴鶴の八十歳を祝

う寿宴は、大正六年五月十三日に行われた。この時の様子について、『書道及画道』第二卷第六号（書道及画道社、一九一七年）所載の「鳴鶴先生寿筵」では、次のごとく述べている。

日下部鳴鶴先生の八秩壽筵は所期の如く去月十三日を以て日本橋俱樂部に開會せられたるが當日は土方伯武井男股野琢氏を始めとして當代の諸名士約三百名出席頗る盛會なりき、式場の大廣間の床の間には鳴鶴先生揮毫（本誌卷頭に掲ぐ）の自壽七律大幅と吳昌碩寄贈の聯幅（同じく卷頭に掲ぐ但し吳氏は自分の名の碩の字を脱して無頓着なるも面白し）を掲ぐ、午後二時一同着席開會せらるゝや鳴鶴先生は司會者案内にて先生夫妻を始め兒孫夫妻三夫婦二子二孫合せて十人を主賓として上席に招じ、門人總代として田邊碧堂氏祝詞を述べ發起人總代として徳富猪一郎の祝詞は巖谷小波氏代讀しそれより土方伯の祝辭演説あり次に荻野由之博士が恭しく記念品（吳昌碩の鐵筆に成れる印）贈呈したる後ち先生の挨拶ありて式を畢り……。

（一〇二）十一年一月廿七日……享年八十五 井原録之助は「鳴鶴先生を追想す」（『書勢』第七卷第三号、大同書会出版部、一九二三年）において次のごとく述べている。

鳴鶴先生の他界せられてから、はや一年餘を過ぎ去つた、一

月廿七日が一周忌の當日であつたが、都合によつて廿一日に繰上げて菩提寺の豪徳寺で法回を営まれて、廿七日には同好會の癸亥初會を同寺に開き、先生の墓を吊ひ、書を談じ先生を追懷した、先生の奥城は立派に出來上り、吳昌碩の書いた文字は、花崗石に深刻せられて永久に傳ふることになった、後室はご健在であるが、百歳の後筆が異なつては面白くないといふので、一緒に書かしめたのである、吳俊卿は老耄したといふ噂があるけれど、此篆を見れば、頸拔なもので、更に衰頹の趣を見ぬ、是も鍛鍊の結果であらう。

（一〇三）夫人 鳴鶴の夫人は、鳴鶴死去の翌大正十二年に逝去した。これについて、『書勢』第八卷第二号（大同書会出版部、一九二四年）所載の「日下部後室逝去」には、「故鳴鶴先生令室琴子女史は老病にて客冬十一月二日逝去され、世田ヶ谷豪徳寺なる先生の塋域に葬られたり。行年八十歳」と記す。

（一〇四）辨二郎 日下部辨二郎。文久元年（一八六一）～昭和九年（一九三四）。旧姓は巖谷。土木技師、実業家。近江の人。

巖谷一六の二男。巖谷小波さざなみの兄。のちに鳴鶴の養子となる。東京大学を卒業後、内務省に入り広島、熊本にて土木監督署を経て、東京土木監督署長となる。明治三十五年、東京市土木局技師長および土木局長を兼務した。また東京鉄筋コンクリート社

長、東京工学院院长、東京市区改正臨時委員などを歴任した。

(一〇五) 旦三 日下部旦三。大正八年(一九一九)、九州帝国大学卒業、九州帝国大学第一外科、金沢医科大学助教授、広島  
の海軍共済病院を経て、広島で開業した。

(一〇六) 別起家 『湖南文存』では「皆側室出、別起家」に作る。

(一〇七) 釀資 資金を出し合う。釀貲に同じ。

(一〇八) 不文 下手な文章。自己の文章に対する謙辞。

(一〇九) 六藝 士大夫として学ぶべき六種の技艺。礼、樂、射、御、書、數をいう。『周礼』地官「保氏」に、「養國子以道、乃教之六藝。一曰五禮、二曰六樂、三曰五射、四曰五馭、五曰六書、六曰九數」。

(一一〇) 末技 瑣末の技術。小技。後漢、班固「幽通賦」に、「非精誠其焉通兮、苟無實其孰信。操末技猶必然兮、矧耽躬於道眞」(『文選』卷十四)。

(一一一) 籀斯 籀は、周の宣王の時の太史籀を指す。「大篆十五篇」を著したと伝えられる(『漢書』芸文志)。斯は、李斯(？前二〇八)を指す。字は通古、楚の上蔡の人。荀子に従って帝王の術を学び、後に秦に仕えて丞相となり、始皇帝の覇業を助けた。法家に基づくさまざまな政策を施行したが、その一つ

として文字の統一を行い、字書『蒼頡篇』を著し、史籀の大篆を省き改め、新たに小篆に創めた。伝は『史記』卷八十七に立てられている。

(一二二) 篆隸 篆書と隸書。

(一二三) 鬱起 盛んに起こる。梁、劉勰『文心雕龍』卷一「辨騷」に、「自風雅寢聲、莫或抽緒。奇文鬱起、其離騷哉」。

(一二四) 鍾王 魏の鍾繇と東晋の王羲之を指す。鍾繇(一五一〜二三〇)は、字を元常いい、豫州潁川長社の人。後漢の献帝の時に孝廉に推挙され、尚書郎、陽陵県令に任じられたが、病を理由に官を辞した。のち曹操に仕えて御史中丞となり、侍中、尚書僕射に昇進し、東武亭侯に封ぜられた。以後も魏の文帝、明帝に仕え、建国の功臣として太傅、定陵侯に封ぜられた。死後、成侯と諡された。書は曹喜、蔡邕、劉德昇に学び、とりわけ小楷を善くしたことで知られる。その書法は王羲之をはじめ、後世の書家に多くの影響を及ぼしている。作品としては、「急就章」、「薦季直表」、「宣示表」、「墓田丙舍帖」などが鍾繇の書として伝えられている。『三国志』卷十三に伝が立てられている。

王羲之(三〇七〜三六五、諸説あり)は、字を逸少といい、琅邪臨沂の人。琅邪王氏の出身で、王曠の子。護軍將軍を経て、

右軍將軍、會稽內史となる。後に官を退いて隱遁し、山水の間に遊び、仙道の修行に励み、悠々自適の文人生活を過ごした。書は張芝、蔡邕、鍾繇の流れを汲み、それらを集大成した。子の王獻之とともに二王と称され、その書は六朝以後に最も敬仰された。伝は『晋書』卷八十に立てられている。

(一一五) 接踵 人々が絶え間なく往来することから、転じて、物事が引き続いて起こること。また、継承すること。『戦国策』卷六「秦策四」に、「韓魏父子兄弟、接踵而死於秦者百世矣」。

(一一六) 姿媚 姿かたちの柔美さ、優美さをいう。唐・韓愈「石鼓歌」(七古)に、「羲之俗書趁姿媚、數紙尚可博白鵝」。

(一一七) 方軌 わだちを並べる。二台の車が並んで行くこと。転じて、比肩することを用いる。『戦国策』卷八「齊策一」に、「車不得方軌、馬不得並行」。

(一一八) 含規孕矩 書の法則を体内に取り込み、会得する。たとえば、梁・袁昂『古今書評』に、「邯鄲淳書、應規入矩、方圓乃成」と見えるのは、その近い用例。

(一一九) 奥旨 奥義。要旨。『旧唐書』卷一百十九「楊綰伝」に、「其所習經、取左傳・公羊・穀梁・禮記・周禮・儀禮・尚書・毛詩・周易、任通一經、務取深義奥旨、通諸家之義」。

(一二〇) 搨摸 書跡を模写する技法の一つ。搨搨ともいう。本

来は双鉤填墨の法をいうが、ここでは広く臨摸の意に解する。

(一二一) 龍跳虎臥 龍が天に向かって身を躍らせ、虎が大地に体を横たえるごとく、威風堂々とした力強い書体をいう。また、筆勢が束縛を受けずに縦横自在で、さまざまな字様を駆使するをいう。古来より書の力強さを、このように龍と虎に喩えて表現することが行われた。たとえば『古今書評』に、「韋誕書、如龍威虎振、劍拔弩張」とあり、また「蕭思話書、走墨連綿、字勢屈強、若龍跳天門、虎臥鳳閣」と見える。

(一二二) 塗竄 文字を塗りつぶして書き改める。改竄。『新唐書』卷四十七「百官志」に、「凡百司奏抄、侍中既審、則駁正違失。詔勅不便者、塗竄而奏還、謂之塗歸」。

(一二三) 殘膏賸馥 残された油やにおい。転じて、先人の大いなる余沢をいう。『新唐書』卷二百一「杜甫伝贊」に、「殘膏賸馥、沾丐後人多矣」。

(一二四) 朽貫 朽ちた錢さし。ここでは転じて、衰えてしまった伝統、慣例をいう。『後漢書』卷四十九「王符伝」に、「寧見朽貫千萬、而不忍貸人一錢、情知積粟腐倉、而不忍貸人一斗」。

(一二五) 墜緒 地に墜ちた緒。衰えた事業、絶えてしまった伝統をいう。韓愈「進学解」に、「尋墜緒之茫茫、獨旁搜而遠紹」。

(一二六) 頽爛 物事が衰退、腐敗する。頽は、くずれおちる、

爛は、腐る意。

(一二七) **魏象** 北魏の造像記を指す。石刻文の一つで、別に造像銘、造像題記とも呼ばれる。仏像を造る際に、発願者が死者の来世の幸福を願って、その由来などを記したものの。代表的なものとしては「龍門二十品」が知られている。

(一二八) **梁闕** これもやはり南朝梁の碑銘や磨崖などの金石文を指す。

(一二九) **鋒穎** 鋭い矛先。転じて鋭い筆法をいう。いわゆる六朝楷書は、一般的に字を角張らせ、力強く線を引いており、きわめて雄渾であることによる。

(一三〇) **蒙茸** 先の旃裘と同じく、毛が乱雑なさまから、無秩序なさまをいう。ここでは氾濫した書法を指す。『史記』卷三十九「晋世家」に、「狐裘蒙茸。一國三公。吾誰適從」とあり、『集解』に引く服虔の注に、「蒙茸、以言亂貌」とある。

(一三一) **廢紃** 紃は、白いねりぎぬ。高級な衣服をいう。見なれぬ語であるが、ここでは廃れてしまった書の伝統を指すか。

(一三二) **風氣** 書画などの芸術における気品、風格。『古今書評』に、「王右軍書、如謝家子弟。縱復不端正者、爽爽有一種風氣」。

(一三三) **嘉道** 清の嘉慶年間（一七九六―一八二〇）と道光年

間（一八二一―一八五〇）を併せていう。

(一三四) **天朝** 朝廷の尊称。皇朝。ここでは日本を指す。

(一三五) **藻翰** 美しい詩歌、文章。藻は、言葉のあや。ここではすぐれた書跡と見てよいだろう。『法書要録』卷六「述書賦下」に、「武后君臨、藻翰時欽」と見える。古くは『文選』序に、「事出於沈思、義歸乎翰藻」とあるのに基づく。

(一三六) **六代** 六朝時代を指す。ここでは三国から隋までの南北朝を併せていう。

(一三七) **奇古** すぐれていて古朴なさま。古くは『新唐書』卷二百三「李商隱伝」に、「商隱初爲文、瑰邁奇古」と見えている。ここでは書法の批評用語。清、康有為『広芸舟双楫』備魏第十に、「奇古。則有若劉玉皇甫麟」とあり、また「南碑奇古之寶子、則有靈廟碑似之」と散見する。六朝の書法における「奇」と「古」については、青木正児氏「古拙論」（『青木正児全集』第六卷、春秋社、一九六九年）が参考になる。

(一三八) **毛碑** 上毛三碑、すなわち多胡碑、山上碑、金井沢碑を指す。

(一三九) **深醇** 深く厚く素朴なさま。『宋史』卷三百八十五「施師点伝」に、「弱冠游太學、試每在前列、司業高宏、稱其文深醇。有古風」。

(一四〇) 象背 恐らくは法隆寺の金堂薬師如来光背銘や金堂釈迦如来光背銘などの造像記を指すと考えられる。

(一四一) 三娘 光明皇后を指す。

(一四二) 三筆 空海、嵯峨天皇、橘逸勢を指す。

(一四三) 逸態 すぐれた風格。立派な姿態。西晋、張景陽「七命」其五に、「大夫曰、天驥之駿、逸態超越」(『文選』卷三十五)とあり、張銑は「奇逸之態、超越衆馬」と注する。

(一四四) 蕪穢 いやしく品がない。『楚辞』招魂に、「主此盛德兮、牽於俗而蕪穢」。

(一四五) 矯々 高く抜きんでているさま。また、志が超然としているさま。『漢書』卷一百「叙伝下」に、「賈生矯矯、弱冠登朝」とあり、顔師古は「矯矯、高舉之貌也」と注する。

(一四六) 磨厓 自然の懸崖または大石の表面を磨き、文字を陰刻または浮き彫りにしたもの。中国では碑に次いで多い形態の金石文である。

(一四七) 方員 四角形と円形。員は、円に通ず。ここでは先の規矩と同じく、書法の規則、法則の意。『孟子』離婁上に見える。

(一四八) 匱乎 はるかに遠いさま。『後漢書』卷四十下「班彪列伝」(班固伝)に、「厥有氏號、紹天闡繹者、莫不開元於太昊

皇初之首、上哉匱乎、其書猶可得而修也」。

(一四九) 窮神盡思 精神を尽くし、思いを尽くす。張懷瓘『書断』卷下「能品」に、「伯英之筆、窮神盡思、妙物遠矣、邈不可追」。

(一五〇) 研幾 研は、みがく、研磨する意。幾は、機微、すなわち、深奥にあるものが、いまだあらわれてきていないものの、微かにある兆しをいう。微かな兆しを究明する意。『周易』繫辞伝上に、「夫易、聖人之所以極深而研幾也」。

(一五一) 法度 規範。規矩に同じ。『管子』卷八「中匡」に、「今言仁義、則必以三王爲法度、不識其故何也」。

(一五二) 建幟 ここでは立場を鮮明にし、一家を成す意であるう。

(一五三) 落々 気持ちが大らかなさま。穏和なさま。『三国志』卷四十、蜀書「彭萊伝」に、「若明府能招致此人、必有忠讜落落之譽、豐功厚利、建跡之勲」。

(一五四) 出類拔萃 他の人よりもひときわみぬけている。『孟子』公孫丑下に、「出于其類、拔乎其萃、自生民以來、未有盛于孔子也」。

(一五五) 逆睹 逆観に同じ。予想する、予見する。三国蜀、諸葛亮「後出師表」に、「臣鞠躬盡力、死而後已。至於成敗利鈍、

非臣之明所能逆觀也」。

(一五六) 循々 順序の正しいさま。また、規則を遵守しているさま。『論語』子罕篇に、「顔淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅。瞻之在前。忽然在後。夫子循循然善誘人」とあり、『集解』は「循循、次序貌」と注する。また、韓愈「通解」に、「自桀之前千萬年、天下之人循循然不知忠易其死也」。

(一五七) 眞諦 仏教語で、真理、真実の意。また、不変の道理。南朝齊、周顒「重答張長史書」に、「若謂探道家之跡、見其來一於佛者、則是眞諦實義、沿文可見矣」(『弘明集』卷六)。また、楊守敬『字書邇言』『評書』に、「明之中葉、若邵寶之學顔、李東陽之學褚、皆能自樹藩籬、獨標眞諦」。

(一五八) 鴻製 すぐれた作品、文章。

(一五九) 服膺 物を両手で胸の前で恭しく持つように、人から受けた教化などを常に大切に守るように心がける。拳拳服膺。

『中庸』八章に、「子曰、回之爲人也、擇乎中庸、得一善、則舉舉服膺、而弗失之矣」。

(一六〇) 陸中内藤虎撰 『湖南文存』では「昭和七年六月。陸中内藤虎撰」に作る。

(一六一) 野村保泉 野村保太郎。大正、昭和期の石工。もとは井亀泉のもとで働き、その廃業にあたって独立し、昭和三十一

年まで市兵衛河岸の一角で開業していた。

◎押韻Ⅱ技・起・軌・旨(上平声四支)／爛・竄・渙・貫・爛(去声十五翰)／刊・紉・還(通韻)(上平声十四寒)／代・背・態・穢(去声十一隊)／年・牋・賢・絃(下平声一先)／思(別韻)・備・幟・萃(去声四寘)／弊・諦・製・替(去声八霽)

(筑波大学大学院人文社会科学研究所科博士課程)